特別活動学習指導研究委員会

一　研究テーマ

思いを実現し，豊かな学級や学校の生活をつくる学級活動の実践

二　テーマ設定の理由

学級活動は，学校生活において最も身近で基礎的な所属集団である「学級」を基盤とした活動です。様々な集団活動を通して，学級や学校生活の中から集団や個人の課題を見いだし解決するための方法や内容をみんなで話し合い，集団として「合意形成」を図り協力して実践したり，一人一人が自己の課題の解決方法について「意思決定」し実践したりして，よりよい生活や人間関係を築き，学校生活の充実と向上を図ります。

このような，特質を踏まえた学級活動の実戦を行います。

〇特別活動における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた実践のための視点

主体的な学び

学校や学級の実態，自己の現状に即して自ら課題を見いだし，解決方法を実践したり振り返ったりしながら，生活をよりよくしようとしていくこと。

対話的な学び

生活上の課題を解決するために合意形成を図ったり，意思決定したりする話合いの中で様々な意見に触れ，考えを広げたり多面的・多角的に考えたりすること。

深 い 学 び

「集団や社会の形成者としての見方・考え方」を働かせながら，問題の発見，課題の設定から振り返りまでの一連の活動を繰り返す中で，各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を総合的に生かし，知識・技能などを集団及び自己の問題の解決に活用していくこと。

三　研究の経過

（1）	5月　2日	教 育 会 館	総委員会，委員顔合わせ，年間活動の見通し等
（2）	6月　4日	中塩田小学校	今年度の活動について，実践事例について等
（3）	6月24日	本 原 小 学 校	教育課程研究協議会事前授業参観
（4）	7月30日	中塩田小学校	実践事例検証①，教育課程午後の部について①
（5）	8月27日	中塩田小学校	実践事例検証②，教育課程午後の部について②
（6）	9月　4日	本 原 小 学 校	教育課程研究協議会への参加，午後の部運営
（7）	11月25日	教 育 会 館	総委員会，研究のまとめ，今年度の反省等

四　研究の内容

1．学級会の実践に学ぶ

事例Ⅰ

『はじめての学級会』

上田市立傍陽小学校

（１）はじめに

現在，１年生７名を担任。７名のうち６名は一緒の保育園から入学してきているので，すでに人間関係ができあがっている。そのため，遊びを決めたり順番を決めたりするときには「〇〇ちゃんが言っているから……」「〇〇ちゃんに反対すると……」「別にわたしどっちでもいいし……」などの声が聞こえてくる。昨年度まで担任していた高学年のクラス（１４名）でも，話し合いをしてみんなで考えたくても，同じ反応が最初に返ってくることが多くあった。また，７名しかいないため，個別での対応が可能であり，「集団」という意識が育ちにくいと感じた。

そこで，１年生のうちから集団としての目標やそのための方法・手段を決め，みんなでそれを実現できるようにしたいと考え，学級会をひらくことを子どもたちに提案した。

（２）内容

～１がっきがんばったねの会をしよう～

① 机の配置

学級会では，みんなの顔が見えるように，向かい合わせの配置にすることを伝えた。

２回目からは「学級会」とわかると，子どもたちで席を移動することができ，話し合いをこれからするという意識を，もつことができた。

② 話し合うことの確認

みんなで何をしたいかを決める。

その際に，

「みんなが楽しめること」

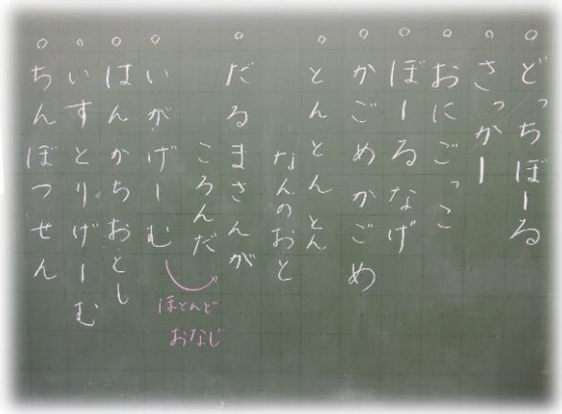
「使える時間は１時間」

「使える場所は教室，暑くなければ体育館も使える」

「意見を言うときは理由もつけて話す」

ことを伝えた。

また，質問はやりたいことが全部出たあとに行うことにした。



③　話し合い

第１時「どれができそうかな？」

「サッカー」は，外じゃないとできないと思う。「ハンカチ落とし」とか「イス取りゲーム」なら教室でできるからいいと思う。

「サッカー」「おにごっこ」がやりたい！

サッカーできない人（私）がいます。みんなでたのしめないと思います。あとさ，いっぱいやりたい！

「サッカー」とか「おにごっこ」はさ，ちがうとき（２学期のがんばったねの会）にやればいいと思うよ。あと，ぜんぶできなくても次のときにやればいいと思う。

第２時「今回（１学期がんばったねの会）は何をやる？」

わずかな人数でも意見を言える児童と言えない児童がいることがわかった。第２時の話し合いでは，暑さのため体育館が使える状況ではなくなったので「教室でできる遊びは何か」を，まず隣の友だちと相談してから全体で考えるようにした。

（３）成果と課題

【成果】

- 話し合いのルールを理解することができた。
- 教師が補足したり詳しく話を聞きだしたりすることで，その子の想いの理解につながった。
- 自分の考えを通したい子が多いが，友だちの話を聞く中で折り合いをつけていくことができた。
- 「自分の考えを聞いてくれる」場があることに気づけた。

【課題】

- 話し合いの場になると，何をどのように話していいかわからず聞いているだけの子がいたので，参加できるように工夫していく必要がある。
- 少ない人数で話をしているので，どの子の意見も通りがちで意見のぶつかりが少ないように感じる。中学生になって大きな集団になったときに，うまく折り合いをつけていけるのか課題。

事例Ⅱ

『みんなで，よりよいクラスをつくる学級会』

上田市立中塩田小学校

（１）はじめに

昨年度，３年生を担任した。自身にとって，初めての３年生だ。

３年生が，子どもたちの力で主体的な学級会を行うためにどうしたらよいかを考え，取り組んできた１年間の歩みを紹介する。

（２）子どもたちの実態に見合った年間計画の作成

３年３組（昨年度）は，２５名在籍しており，日ごろから学習に意欲的な子どもたちが多く，ペア学習やグループ学習による追究を好んだので，話合い活動の素地は身についていた。

年度当初，子どもたちの興味や関心を下に，学級活動の年間３５時間のうち，概ね２０時間前後を学級会の時間にあてるような年間指導計画を作成した。

１学期	２学期	３学期
・１学期のめあてを考えよう ・１学期の係を考えよう ・学級活動コーナーをつくろう ・学級目標を決めよう ・学級のきまりを決めよう ・運動会がんばったね会をしよう ・１学期をふりかえろう	・２学期のめあてを考えよう ・２学期の係を考えよう ・係の取り組みを見直そう ・ボッチャ大会をしよう ・音楽会がんばったね会をしよう ・ハロウィンパーティーをしよう ・クリスマスパーティーをしよう ・２学期をふりかえろう	・３学期のめあてを考えよう ・３学期の係を考えよう ・冬季室内オリンピックをしよう ・学習発表会の出し物を決めよう ・６年生を送る会の出し物を決めよう ・３年生がんばったね会をしよう ・１年間をふりかえろう

学級会は，子どもたちの「やりたい。」という思いが引き出せるような内容を大切にした。

（３）子どもたちの主体の学級会までのプロセス

「学級会」を行う上での話合い活動の仕方が国語の教科書で示されるのは，ちょうど３年生である。そのため年度当初の話合いは，担任による学級会の模範的なプロセスを示す必要がある。本学級では，【司会者】【板書】【掲示】を５人程度で行えるように，１学期の学級会の中で，それぞれの役割を示しながら，学級会の流れに慣れ親しむようにしていった。

○　学級会の流れ（簡単に）

議題の確かめ　出し合う　くらべ合う　まとめる（決める）　話合いのまとめ

始め方の例
・はじめの言葉
・司会グループの紹介
・議題の確認
・提案理由やめあての確認

終わり方の例
・決まったことの発表
・話合いのふりかえり
・先生の話
・おわりの言葉

出し合う

- 一人一人の意見を発表し合う。
- 賛成意見や反対意見を述べるのではなく，様々な考えを認めながら発表し合う。

くらべ合う

- 出された意見を理解する。
- 比較し共通点や相違点を見つける。
- すぐに賛成や反対意見を述べ合うのはなく，合意形成を目指す話合いをする。

まとめる

- 合意形成における３つの視点

①　互いの意見を理解し合う（相手の立場に立って共感的に理解する）
②　何が違うのかを明確にする（理由を明確にして比較する）
③　見方を変える（視点を変えて比較する）

（３）成果と課題

【成果】

２学期になると，子どもたちは司会者グループを班で輪番制にし，できる限りたくさんの子が司会を行えるようにした。３学期の「３年生がんばったね会」では，行いたい遊びが一つに絞れなかったことから，「写真パズル係」と「思い出すごろく係」に分かれ，２グループ別々による話合い活動を主体的に行うことができた（１枚目の写真）。

【課題】

３年生の話合い活動で一番難しいのは，「折り合いのつけ方」だった。合意形成の例を示しつつもなかなか思うようにいかなかったので，本学級では，話合いが気持ちよく終了できるよう，最後は拍手で終わるようにした（２枚目の写真）。

事例Ⅲ

『誰もが安心して臨める「学級会」をつくる』

上田市立川辺小学校

（１）はじめに

現在担任している６年生のクラスでは，私が担任となった昨年度から，学級会にチャレンジし始めた。昨年度は，全部で１２回の学級会を開いたが，最初は戸惑っていた子どもたちも，自分の考えをみんなに聞いてもらえたり，自分の考えがみんなに認められたりする経験を積み，回数を重ねるごとに「早く次の学級会をやりたい！」と話してくれるまでになった。主体的に学級の課題を見つけて友と対話し，解決に向けて合意形成していく経験は，児童の学級への所属感や自己有用感を高めており，安心して生活することができる学級づくりにつながっているように思う。

しかしながら，その反面，「学級会は好きだけれど，司会は緊張する。」「どう進めていったらいいか分からなくなってしまうから，司会役が怖い。」と，輪番制で回している司会進行役に不安を感じている児童もいる。そこで，児童が安心して学級会の司会進行に取り組むことができるようにするための手立てとして，「学級会進行チャート」を作成し，実際に司会役の児童がそれを使用して学級会を行ってきた実践について紹介する。

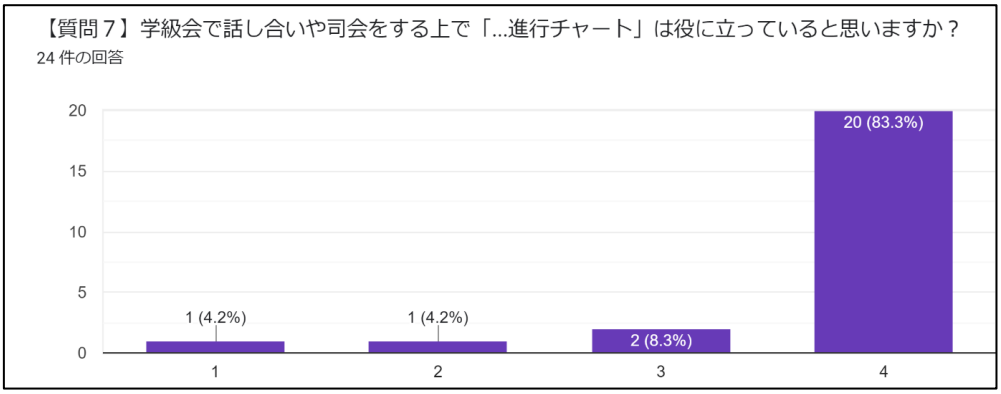
（２）内容

作成にあたって，国立教育政策研究所教育課程研究センター『みんなで，よりよい学級・学校生活をつくる特別活動（小学校編）』を参考にした。

学級会オリエンテーションでは，学級の児童全員に配付し，学級会の進行の仕方を確認した。また，司会進行役の児童が，このチャートを見ながら計画を立てたり，当日の司会進行を行ったりすることができるように，日直の進行表と同様に，クリアファイルに入れていつでも参照できるように設置してある。さらに，児童が読んで分からないところや進行上困ってしまったところに，これまでに２度の大きな修正を加えた。現在のものは Ver.3.0 である。学級会の途中でも慌てず全体を見渡せるよう，A3 の 1 枚で作成した。

（３）成果と課題

進行チャートについて児童に簡単なアンケートを実施した。



【主な意見】

〇進行の仕方に迷って，詰まったときに使えるから。

〇司会進行をしている人とかもよく見ているし，「これどうすればいいんだろう？」というときに取説みたいに役に立つのでいいと思う。

〇話し合いの流れが分かってよい。司会の人以外も，司会の気持ちになれる。

〇できればあってほしい。司会を助けてくれる。

〇困った時先生を頼りにするのではなく，学級会進行チャートがあると自分の力で頑張って進めようと思える。やる気も出る。

▲チャートを見ながらやることを忘れていた。自分で考えて進められるから。

【成果】

多くの児童が，「学級会進行チャート」が役に立っていると思っており，それがあることで安心して学級会に臨むことができると感じている。少しでも学級会に対するネガティブな気持ちが和らいでいたら嬉しい。

進行役のみならず，その他の児童にとっても，手掛かりとなっていることが分かった。

【課題】

あくまでも，私が考えて作ったものなので，内容や言葉選び等，これが本当に学級会の進行の手掛かりとしてふさわしいか，実践の積み重ねが必要。修正を繰り返しつつ，より適切なもの，より使いやすいものにしていく必要がある。

文字数が多く，読むことが苦手な子にとっては，使いにくいものである。また，高学年向けの内容になっており，低学年にはどうしても使いにくいものである。紙幅の問題を乗り越えて，どうにかして平易にしつつ，図示できないかも検討している。

2．児童会活動・生徒会活動の実践に学ぶ

事例Ⅰ

『全校みんなで考え，実践する児童集会』

上田市立東小学校

（１）はじめに

昨年度まで，感染症拡大防止のため，学年をまたいだ活動に制限があった。児童集会はできず，各委員会でどのような活動をしていたか，また全校はその活動を通して何ができるようになったかがぼんやりとしていた。

今年度は，掲示物や写真を通した活動の視覚化や，お昼の放送で児童会三役からのフィードバックをすることで，全校で「今どのような活動をしているか」「私たちは何ができるようになったか」「全校でどのようなことを大切にしていくか」を意識して一体感を持つことができるようにしていく。中でも今年度は「清掃」に重点を置いて進めていく。

さらに，本校のグランドデザインにもある「一中区学校園の縦のつながりを深める」を具体化するため「他校との児童会の交流」を考えた。縦のつながりと横のつながりを厚くするため，お互いの姿を見合い，何か一つでも共通認識ができるものをもって中学校へ進学してほしい。

（２）活動の年間計画

１学期	２学期	３学期
・E～ね東小をたくさんみつけよう	→	→
・各委員会でイベントの計画をたてよう ・児童総会にむけ議案書をつくろう	・２学期の目標を持とう ・前期児童会終了 ・後期児童会開始 ・児童会祭り（朝風祭）の計画をたてよう	・３学期の目標を持とう ・引継ぎの準備をしよう
・自分たちの清掃を振り返ってみよう（児童集会）	・清掃のめあてをどのくらい実践できているか，ほかの学校はどのようなとりくみをしているのか知ろう。	・自分たちの進学する中学校はどのような清掃をしているのかを知ろう。
・１学期の振り返りをしよう	・朝風祭を成功させよう ・２学期の振り返りをしよう	・児童総会

（３）成果と課題

【成果】

全校で意見を交流し合うことを通して一人ひとりが目標を持つことができた。全校で「長野県１位の掃除を目指す。」という大きな目標を達成するための見通しを持つことができた。課題を共通認識するいい機会となった。

【課題】

初めての児童集会ということもあり，自分の意見を言葉にできない児童が大多数だった。子どもたちの中で，比較対象もなく「どのような清掃が長野県１位なのか？」「なぜ無言清掃をしなければならないのか。」と疑問に思う子が大多数だった。清掃をなぜ一生懸命やるのか，なぜ無言清掃を大切にしているのかをもっと全校で意見を出し合える場面が設定できるとよかったと感じた。

＊児童集会のようす

①課題提起

（出し合う）

②意見交換・関わり

（比べ合う）

③目指す姿の共有

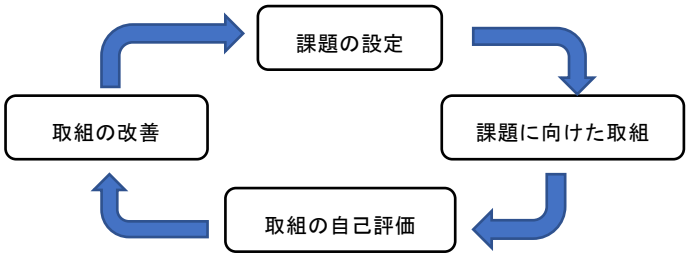
（まとめる）

事例Ⅱ

『自分で考え行動したり，調整したりする力を育成するため』

上田市立第一中学校

（１）はじめに



令和４年度より毎朝の 10 分間を「一中タイム」と題して，生徒一人ひとりが自分と向き合い，自分でどんな時間にするのか，自分なりに計画を立てて，その計画に沿って一人で行う時間を設けている。令和５年度は教科学習や定期テストともつなげる「一中タイム」の在り方を考え，生徒が自分の学びを振り返り，調整しながら自分の伸びを実感できる時間となるように取り組んだ。

その中から「一中タイム」だけでなく日々の授業や生徒会活動など，教師が指示を出すのではなくあらゆる教育活動を徐々に生徒に委ねていくこと。さらに，子どもが主体的に，将来を見据えて計画・実行できる自己調整力の育成を目指すには「今の私」からの視点で「学びの PDCA サイクル」を回させるのではなく，「こうありたい私」からの視点も必要だということが見えてきた。

そこで「一中タイム」を取り組んできた令和５年度生徒会の活動を簡単にまとめてみる。

（２）内容　　～スローガン・活動の軸・年間計画・引継ぎまで～

スローガン

一学期（前期）　糸　～「自ら」向き合い　「自ら」考え　「自ら」行動する生徒会～

二学期（後期）　糸　～「共に」向き合い　「共に」考え　「共に」行動する生徒会～

《スローガンに込められた願い》

メインタイトル　なぜ『糸』にしたのか？→『糸』というのは細かい繊維，一つ一つを撚り合わせてできるもの。そして私達は，「一人一人の力が集まり，みんなで築き上げていく生徒会」を目指している。この個々が集まって一つのものが完成するという点が『糸』と私達が目指す生徒会に共通しているため。

この『糸』を私達が最終的に目指す姿とする。そのためには段階を踏んでいかなければならない。

サブタイトル　みんなで「共に」生徒会を築き上げていくためには，一人ひとりの力が必要。

→一学期は，自分自身の生徒会での在り方や生徒会への関心を高める学期。

一つ一つの繊維がしっかりしていないと一本の糸にはならないように一人一人の力がしっかりしていないと生徒会はみんなと共には築けない。そのため，一学期のサブタイトルは「自ら」をメインに進めていく。

→全校生徒の主体性を上げられるような活動をしていく

二学期からは，一学期で出来上がった一人一人の力を撚り合わせ，糸の形にしていく。そこで更に強固な糸にするために生徒会企画などでさらに「撚り」をかけていく。そして全校と共に一致団結して色々なことに取り組む。二学期からのサブタイトルは「共に」をメインに進めていく。

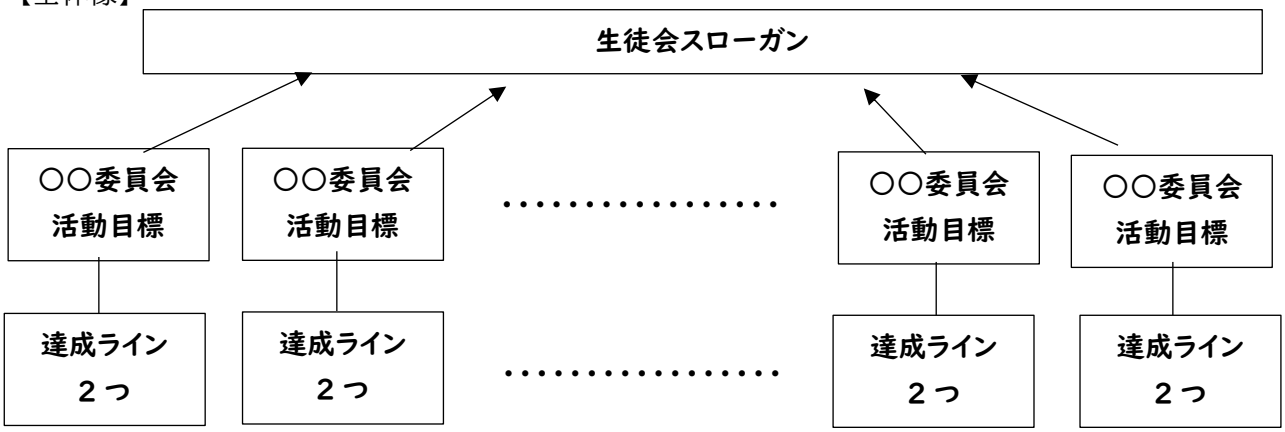
「自ら」「共に」の意識を持たせるために重要なのは目標。そこで生徒会スローガンという大きな目標の下に各委員会で目標を掲げる。

「一中 SDGs」

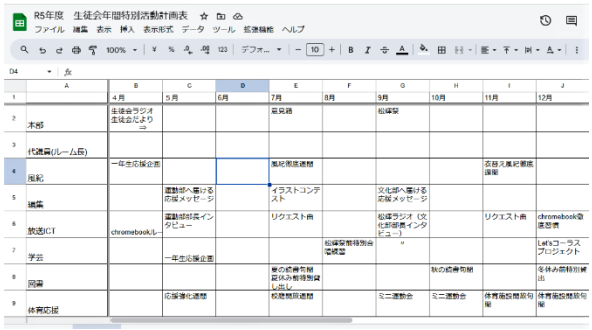
・目的　目標を達成するごとに，「達成感」や「充実感」が味わえ，全校生徒の笑顔につながると同時に，生徒会活動への参加意欲向上を図る。

・活動内容　今ある 12個の委員会に，1 つずつ活動目標を定める。それに加えて，達成ラインを設け，全校で目標の達成に向けて活動していく。

【全体像】



年間特別活動計画（記録）・委員会ごとフォルダ整理



それぞれの活動の中で生徒たちの意識の中心にあったもの。

① chromebook を最大限活用していくということ（chromebook 導入３年目）。

② 常に執行委員が生徒会の活動を共有していくこと（調整をスムーズに）。

③ 生徒会を自分たちが引き継いだときに感じた不安を減らすということ（持続可能）。

こういった意識は，「一中タイム」を通して理解し，必要性を感じた「PDCA サイクル」を実践していく中で，学習以外でも「こうありたい」姿に近づけると生徒自身が実感してきているからではないだろうか。

（３）成果と課題

「一中タイム」については，今後も継続する予定だが，生徒だけではなく，職員にも価値づけをしていくことが形骸化させないためにも重要になる。

生徒会活動のみではなく，「自分で考え行動したり，調整したりする力」がどのようにつながっているのか「見える」ようになると必要感へとつながる。

五　研究のまとめと課題

今年度の教育課程研究協議会では，上田市立本原小学校の実践から，高学年における学級会のもち方や進め方などの模範的な授業像，児童の思いや考えを大切にした主体的な学びの姿を参観させていただくことができました。

また，午後の研究協議会においては，本委員会のテーマである「思いを実現し，豊かな学級や学校の生活をつくる学級活動の実践」について実践事例を発表したり，各校における特別活動の工夫や悩みを討議したりしました。

〇学習指導研究委員による実践発表（２名）
〇「学級会を開こう」視聴と年間指導計画作成のお願い
〇特別活動の取り組みについての情報交流

参観されている先生方には，各校における特別活動の工夫や悩みを意見交流していただく時間を設け，充実した話し合いを行うことができました。

また，各委員による実践事例を持ち寄り発表し合ったことや教育課程にご参加された先生方に意見交流をしてもらったこと等，互いの学びを深め，日々の授業に結びつく研究となりました。

年に数回実施した定期委員会においては，委員自身の研鑽につながると同時に，各校にそれぞれの事例を持ち帰ることで,特別活動の取組について各校においても理解を深めてもらう場となりました。

次年度も互いの実践事例から学び高め合える委員会活動を継続していきたいと考えています。